

# オウム真理教対策住民協議会ニュース

## カルト宗教をめぐり 被害者救済と法律問題

―オウム真理教対策住民協議会 第27回学習会要旨―

11月9日(土)に行われた学習会では、今でも続く統一教会問題や摂理の悲惨な被害者救済に取り組んでこられた、弁護士久保内浩嗣氏が講師として、カルト問題について話された。

事務所の先輩弁護士と共に、カルト団体に悩む信者や家族の相談を受け、被害者の現実を知り、救済活動を行うようになったと自己紹介。講演内容は多岐にわたり、特に統一教会・摂理については、裁判の判例や被害状況などが資料で準備され、統一教会の日本での26年間の被害総額が1千億円との紹介があった。この数字も掌握されている分、実態はもっと多くなる。被害相談の多い団体は、他にヨハン早稲田キリスト協会・親鸞会・顕正会・アレフ・ひかりの輪となっている。

「カルトに入信するのは、勧誘対象の低年齢化で、中・高校生に力を入れている。さらにカルト信者が教師となり、教子を勧誘する」との事態も注意したい。入信する信者は皆よい人で、頭もよい人となると、このような人が人を騙すことではないだろうと思ひ、正体を隠したヨガやキャンパスのセミナー、就職活動セミナーに誘われても疑いを持ちにくくなる。後に宗教団体と言われ、1年以上付き合ひ、信頼関係ができれば入会も拒否することは難しい。最近はいんターネットを使って、入信させる方法が主流で、誘う側としても、精神的に楽で体力を使う事なく活動できるからである。



鳥山地域  
オウム真理教対策  
住民協議会

な範囲を逸脱する違法な行為として、統一教会に9567万円の支払いを命じた。これは東京地方裁判所平成21年12月24日の判決だが、統一教会をはじめとした判決例は数多く、講師より資料が提出された。

### カルトはなくなるのか

カルト問題は難しく、人間が生きる限りなくなる事はないだろう。社会は分りやすい事件(オウム真理教を含め)を忘れていくだろうし、オウム真理教事件を知らない人間が多くなるだろう。カルトの危険性や被害を知り、地道にあきらめず、様々な形で社会に対して問題提起をしてゆく事が大切であり、それが鳥山地域住民協議会の皆さんの活動である。オウム真理教以外にもカルトはあるのだと認識して、自分たちも正体を隠したカルトにいつ勧誘されてもおかしくないという事実を、関心を持つ人、友人、子供、孫に伝え家族と話あう事も大切である。そういう地道な活動は、カルトに入る事を防ぎ、住民の皆さまが活動を続ける大切さに繋がると確信した。

### カルトの裁判では

宗教団体を隠し勧誘し、宗教選択の自由を奪ひ、それが正当な行為でない場合は、違法となると民法にあるが、このような法律を逸脱した行為は後を絶たない。統一教会に

より被害を受けた女性の判決では、マンションを売却し献金をしなれば、色情因縁を解消できないと不安を煽り、売却代金を献金させた。このような社会的に相当

## 連載 オウム真理教と闘い続ける③ 大場加代子さんに聞く

夏のお祭り・イベント会場での募金活動では、常に先頭に立ち活動をしていた。住民協議会の他、鳥山上町会の役員を始め数多くの地域の活動に携わっている。「オウム真理教に反対する活動は、どんな事でもすぐに反応する」との発言は、高齢を感じさせない。「オウム真理教が鳥山地域に居住するようになってからは、ほとんど毎日無我夢中で活動した」オウム真理教がセミナーを開催したと聞けば駆けつけ、ピラを配り信者に「親元に帰らなさい」と優しく諭す。日常は穏やかな優しい笑顔がトレードマークだが、いざとなると背筋が伸びる。「主人が先生をやっている、その頃は集会やデモに連れていかれていた。その影響かな」昭和世代の私には共鳴するところが多い。

## 上祐史浩という人物の考察 その3

### 上祐は歩む道を間違えた

地下鉄サリン事件などの犯罪によるオウム真理教の一斉検挙後、上祐も文書偽造・偽証罪で4年間勾留されたことは前回書いた。出所後、上祐はオウム真理教の後継団体アレフに戻ることにした。私はこの時期が、上祐の身の振り方にとって、重要なポイントと捉えている。一般市民を巻き込んだ無差別テロ事件を起こし、多くの死者を出した事実を、勾留中に上祐自身が真剣に向き合い、悩み苦しんだのが問われる。だがその後の上祐を見ると、4年間の刑務所暮らしで、自身を悔い改めることはなかったと見るのが妥当だろう。

### 安易な道を選んだ上祐

オウム真理教に留まるより、脱会し新たな社会生活へと向かうことを想像するに

オウム真理教の入居当初、施設に右翼が銃弾を撃ち込む事件があった後「上祐の部屋にも入り、鉄板で囲まれていたのを覚えていた」。信者の部屋にも入り親元に帰るよう説得もした。今になって回想すると、そのような活動が良かったのか悪かったのか分らないが、オウム真理教を何とかしなければ、と身体が自然に動いたと語る。「オウム真理教があれだけの事件を起こしたのに、なぜ、今でも信者が入会するんでしょうね」。住民協議会の活動をしていると、誠に歯がゆい問題だが、地下鉄サリン事件が1995年、それから18年が経過し、今の大学生のほとんどが知らない世代となる。鳥山地域には、上祐史浩が代表のひかりの輪が居住するが「上祐という男は何を考えているのか分らない、そこが不気味です」と言う。これからも解散・解体を目指して、活動を継続したいと結んだ。

は、4年間の歳月は充分過ぎる時間であった。その時上祐が行うべきことは、オウム真理教を再生することではなく、オウム真理教に関わった事件について、社会や被害者に謝罪し反省することで、その行為自体が自身の再生にもつながった筈である。だが上祐はあえて安易な道を選んだ。確かに、脱会し自立への道はあらゆる困難が考えられる。家族との関係、一般社会との共生、就労と共に、麻原の呪縛からの脱却などを始め、予想もできない様々な障害が待ち受けているかもしれない。しかし上祐には、あえてその道を進む勇気を持って欲しかった。上祐の変わるチャンスは更にあつた。上祐の変わるチャンスはもう一度あつた。それはアレフ時代、オウム真理教の(裏面へ続く)

進む方向性で意見が対立し、代表の座を追われた時代。しかしこの時も自らのエゴを貫き、新たな団体の設立への道を歩んでしまった。オウム真理教入信から、他の信者と違い麻原彰晃を、ある意味「醒めた眼」で見つめていた少数ない幹部信者だからこそ、違う道も歩めた筈である。上祐にとって新たに「宗教団体」を設立することなど、容易過ぎる筈だ。それからの上祐は、自我と自尊心の塊を形成するようになる。急に「聖地巡礼」を開始。沢山の虹を見たと言ふ神がかりとなり、金剛棒や龍神の夢を見たと言ひ、自己を形造っていく。それは、傍から見ると誠に滑稽なこととして映る。やがてひかりの輪の設立に身を落としていく。

### 上祐の光と影

上祐はひかりの輪設立の目的を2点挙げている。ひとつは、サリン事件などオウム真理教による犯罪で、被害を受けた人への支援として賠償を続ける。ふたつめは、麻原回帰を目指すアレフ信者の脱会を促し、ひかりの輪に入信させることで救済するとしている。麻原の様に、大言壮語を言う訳でもなく、いかにも上祐が考えそうな内容で、誰が聞いても上祐の言葉はもっともらしく、「いつもあなたの傍に寄り添い、見つめていますよ」と思わせるから不思議だ。それは上祐自身も気づいていないかもしれないが、上祐の持つ生まれたい才能でもあるが、別の角度から冷静に見ると、底が浅く三文芝居の世界を演じているように見えてくる。さらに、観察処分が解除されるまでは本心は隠し通し、芝居を演じ切るうとの強い意志が見えるところが、不気味さを増幅させる。

## 第27回抗議デモでの抗議文全文

11月9日(土)に行われた、オウム真理教(ひかりの輪)に対しての抗議デモで読み上げた抗議文である。当日はひかりの輪より、副代表広末晃敏が対応し、抗議文を受け取った。ひかりの輪より住民協議会へ、書籍などが手渡された。住民協議会は、ひかりの輪はオウム真理教の後継団体であること、代表である上祐史浩自身の言動には、真実味がなく信頼できないことを述べた。

### 抗議文

烏山地域住民協議会とオウム真理教との関いは、2000年から開始され今年で13年目となるが、オウム真理教は自らの団体の都合で、名称の変更・分派・分裂などを繰り返し、地域住民を翻弄し悩ませてきた。現在烏山地域には、オウム真理教時代は最高幹部で活動、アレフでは代表を務め、その後アレフから分裂、ひかりの輪を設立した上祐史浩が居住する。烏山地域住民は、現在も上祐史浩とひかりの輪を承認していない。

1995年ひかりの輪の前身、オウム真理教が起こした無差別テロ事件は、13人の死者と6500人以上の負傷者という、かつてない事件として国内外を震撼させた。上祐はロシアから帰国し「地下鉄サリン事件はオウム真理教の犯行ではない」と、声高に無責任な暴言を振りまいた。しかし、上祐はすでにこの時、オウム真理教が、サリンを製造・使用することを認識しての発言であった。組織を守るとの大義名分を振りかざす、自己中心的な言動は、多くの国民や被害者・遺族の感覚とはかけ離れたもので、上祐の人間性を如実に表わす一面でもあった。ひかりの輪を、オウム真理教を超える正しい「宗教」と自画自賛する上祐だが、烏山地域では、誰ひとりとして同意する住民はいない。

私たち烏山地域住民は、このような信頼に値しない人物が代表の、オウム真理教ひかりの輪・アレフの解散を要求する。

平成25年11月9日

烏山地域オウム真理教対策住民協議会  
会長 甲斐 円治郎

## 第27回抗議デモ・学習会のアンケート報告

【実施日】 2013年11月9日(土)

【回収枚数】 49枚

【開催情報の入手方法】 協議会ニュース14、チラシ3、町会自治会回覧16、その他13

### 【学習会及び協議会活動への感想】

- ・オウムだけでなく深い問題を聞くことができ、大変良かった。(初)
- ・大学生の子供と今日の話を話したいと思います。(8回)
- ・勧誘事例についてはわかりやすかったが、判例は言い回しが難解であった。(初)
- ・裁判判例など具体的なものを知ることができ、力づけられた。自分の子供が勧誘されたらと心配になる。
- ・カルト宗教の勧誘の手口や対応についてふまえた話を伺い、高校生、大学生の子供を持つ親として、いろいろ考えさせられた。(6回)
- ・オウム以外にもたくさんのカルト宗教があること、日頃から忘れてはならない等、気づかされるのがたくさんありました。貴重な機会をありがとうございました。(初)
- ・日を重ねるごとに忘却との戦いであると痛感します。しかし若い親子の将来を守ることが年配者の役目であり、彼らに伝えていく事が、義務であることを自覚しなければならぬ。
- ・知識だけで予防できない問題の難しさを知りました。今回の学習会のお話は、是非学生達に聴かせたい内容だと思いました。区内大学へも声をかけて、学生達が参加できるようになると良いと思います。(初)
- ・デモ行進は余り意味がない様に思う。労多くして何も進展しないと思う。教団の人達を学習会に呼ぶ位の構えがあっても良いのではないかと。辞めていった元幹部らに話をさせるというのも効果的だろうと思う。(10回以上)
- ・身近な問題と思った。内容がわかりやすく、この様な活動は続けていかないと。年々デモの参加者が少なくなっている現状を変えるにはどうすればいいのか。若い人たちは(自分の子ども達を含め)危機感を持っていない。(10回以上)
- ・若者に対する脅威について、理解することができた。「見分け方」の資料は参考になった。(7回)
- ・サリン事件を忘れない様に、抗議デモに参加です。(初)
- ・SNSを活用した勧誘が増えて、対象が低年齢化(高校生)していることに不安を感じた。オウム(カルト宗教)に気を付けて、事件を風化させない為にも、この活動は必要だと思う。(初)
- ・「反社会」と「反オウム」という感じの似た者同士で対決していないだろうか。「お互いに歩み寄ろう」とか「その人らしく生きる為に苦痛を取り除く為の話し合いをしよう」という雰囲気は感じられませんでした。(初)

## 住民協議会活動報告

11月25日(月) 協議会ニュース131号初校正  
12月2日(月) 協議会ニュース131号再校正

12月6日(金) 事務局会議  
12月10日(火) 実行委員会  
12月10日(火) 協議会ニュース131号発行

協議会ホームページアドレス <http://www.kyogikai.jp>

この協議会ニュースは、皆様の募金により発行されています。